地球限定。

遊庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地球限定。

【Ｎコード】
Ｎ８５９９Ｚ

【作者名】
遊庵

【あらすじ】
騎士団でもトップクラスの剣さばきをほこり、魔術師団長にも劣らない魔力をもち、将来を有望視されていた俺、ライン・Ｓ・ツヴァイクが。
寝て起きたら地球とかいう魔力も魔物も魔王も戦いもない世界にきて、右も左も文化も言語もわからない状態でほっぽりだされた。
なるほど、これからここで生きろという、我等が精霊のお告げだなーーーーって、
何故だぁぁぁーーーーっ！！

プロローグ

地球。

魔力にみなぎる魔物、
闇なる存在…すなわち魔王もいなければ
光なる存在…すなわち勇者や、騎士団、
宮廷魔術師もいない。

この世界で、俺は生きるのか？

右も左も、言語も文化も、何もわからない状態で、この俺を異世界にほっぽりだしたというのか？

視界いっぱいに広がる灰色の道路。

みっちりと隙間なく建てられている小さな城というにも、小汚らしさのにじみでる建造物。

警戒の色が微塵もない、鎧も着ない奇妙な格好をした人々。

視覚、聴覚、味覚、感覚、嗅覚。
全ての感覚が違うこの世界に、たった一人。

今初めて、一介の騎士である俺は神たる精霊たちを呪った。

俺と美人。

だりぃー。家帰るのめんどくせーなぁ…
そんな事を思いながら、俺「柳　源馬」はとぼとぼと駅から家の間を歩いてた。

一度も染めた事のない黒髪が夜闇に溶け込む。見よこのキューティクル…って見えないか。

駅から家までの道のりは、蛍光灯もないせいか異常に暗い。
多分、人がいても気づかないであろう。
そんな道を通れるのは、俺だからこそだ。
空手黒帯、全国大会優勝経験あり。剣道も同じく優勝したこともある。

…今やってねーけど。

昔の優越に浸りながら歩いてると、前方に人が見えた。

こう見えても視力はいい。
この暗い道を通れる理由だ。

「…え？」

思わず声が出てしまった。
向こうも驚いてるようだ。

無理もない。

その驚いた双眸から覗く瞳の色は、思わず見惚れてしまいそうな真紅。
人間離れした美貌に、海を思わせる髪色は毛先に向かってグラデーションがかっている。

ーーーこんなきれいな女（男？）を見て誰がおどろかずにいられるか。
そりゃ、声も出るだろ？

ーーーこっちみてるし。

ーーー話しかけてみようかな。
いやいや、誤解するなよ？決して声かけて仲良くなって美人とラブラ（以下略）フラグを立てようとか、そういうんじゃなくてね？

「ーーー貴殿」
「うぉおうっ？！」

いきなり話しかけられて変な声が出てしまった。
それもそうだ。話しかけてきてるのはあの美人。

ーーー変な喋り方する人だな。
でも間近でみても、やっぱ綺麗。

「おどろかせてしまったようだな。すまない。」
「あ、いえ…すいません。」

何で謝ってんだよ俺！
一人ツッコミをいれつつ、「俺に何の用ですか？」と聞いてみる。

美人は、バツが悪そうに「ぁー…それが、その…」としばらくしどろもどろしてたが、やがて

「…貴殿は…一人暮らしか？」

「え？」

「その、今夜は一人か？」

少し照れたように、美人は目線をあちこちに向けながら言った。

ーーーお。

「…今夜は…家に俺一人、です。」

ーーーまさか。

「…そうか。なら…今夜…」

「我を、貴殿の所に泊めてくれ」

ーーーフラグ立ったぁぁ？！！

俺とイケメン。

何でこうなったんだ。

電気ポッドでお湯を沸かしながら思考を巡らせる。

結局あのあと、美人は家に入れてあげた。

あの時は暗がりで美人としか認識してなかったが、明かりをつけて見てみると色々困った。

まず、服装。

西洋の王宮で見られるような騎士の服のような物をきていて、なんと剣を二本も持っていた。

俺が銃刀法違反で捕まったらどーすんだよ！と心配になったので、丁重に取り上げて（？）押入れにしまったが…

残念すぎる事が起きた。

服装なんかどうでもよくなるくらいに。

そう、この美人。

ーーー男でした。

明るみの中で見ても

整いすぎた顔立ちも通った鼻筋も小さな顔も切れ長の目も長い色素

の薄いまつげも形の良い唇も海のようなきれいすぎる髪も、さっきとなんら変わらない。

が、身体は違う。

痩身ながらもしまった筋肉は服装の上からも十分にわかる。
さらに長身。俺とかわんないから１８０はある。

何より。襟元の空いた服から除く喉仏や鎖骨が、彼が男だと象徴してた。

声も、さっきとなんか違うし。
俺が美人と思い込んでたから、ビジョンでもかけられてたのか？

とにかくアレだ。
総称してイケメン。

つまり今の状況は、
人間離れした美貌を持つ男と俺の二人キリの空間。

さらに、今日このイケメンはここに泊まる。

が、俺の部屋にはベットが一つ。

一緒に寝る。

ーーーいくらイケメンだからって、俺はそっちの趣味ねーぞ！

俺の心の叫びを表すように、ヤカンが汽笛をならした。

これから。

食卓に湯気だった紅茶を二つ置き、俺はイケメンと向かい合うように座った。

「どうぞ。」

「…恩に着る。」

イケメンはずっと何かを考えるような面持ちをしていたが、紅茶を一口すると表情がすこし緩んだ。

「…うん。うまいな」

ーーーい、イケメン現る。

悩殺スマイルとはこれをいうのか。

とりあえず、この美貌を前に聞かなければならない事があるだろ、俺。

そう言い聞かせて、イケメンの真紅の眼をまっすぐ見つめた。

「あの、名前。教えてもらっても？」

「…そうだな。まだ名乗っていなった。」

イケメンは俺と視線を合わせると

「ライン・S・ツヴァイクだ。失礼だが、貴殿の名前は？」

「俺は、柳　源馬です。…ラインさんとお呼びしても？」

「…ラインでいい。俺も源馬と呼ばせてもらう」

そういうとイケメンは「あと改まった言葉使いもしなくていい」とつけたした。

「ーーーじゃあいいな。改めてよろしく。」

そういうと、少しの間静寂が訪れた。
ラインは家のあちこちに目を見張らせている。

「ーーー源馬、みたところこの明かりは炎じゃないようだが…どんな魔法を使ってるんだ？光属性か？」

ーーー何だこいつ。
いきなり魔法だのって…

服装にせよ容姿にせよ、異質すぎるだろ。

「…電球だけど。なんで？」
「電球？なんだそれは。」

「いや、何だっていわれてもなぁ…つか魔法って何よ。」

そういうと、ラインは唖然とした表情を浮かべる。

「魔法がわからなっ…ま、まさか！なら魔物からの襲撃はどう対応するというのだ！」

「魔物ぉ？んなもん、存在しねーよ。あっても画面上が精々。いねーよ、魔物なんてファンタジーな生きもん」

ラインの双眸はみるみる大きくなって行く。

「う、嘘だろう。魔物がいないなら魔王がいない事になるじゃないか！」

「うん…魔王もいねーぞ？おい、ライン。落ち着け、大丈夫かお前。」

「お、お、落ち着けるか！ここは魔力がものをいう世界だぞ！それが魔王も魔物もいないなんて、信じられるわけがないだろう？！」

ラインは俺の肩をつかみ顔を近づける。

「うぉっ？！近いって！」

「教えてくれ、ここはどこだ？！なんて世界でなんて国で、どんな世界なんだ？！」

肩を激しく揺さぶられながらも、俺はラインに諭すようにつげる。

「ここは、地球だ。俺がいる、この国は日本っていう。魔力とかが存在する世界じゃない。」

ラインは面食らったような顔して、俺を突き放し、一人で何やら考察をはじめた。

「…なら…どういう事だ、俺は自室でっ…ここは…違う世界？…いや、そんなはずはない、あの魔術は古代に封印されたはず…」

「ーーーなぁライン。俺も状況が飲み込めないんだが…どゆこと？」

言葉を投げかけても返事がなかったが、数テンポ遅れてラインはゆっくりこちらを振り返る。

「よくきけ、源馬ーーー」

「俺は、この世界の住人ではない」

ーーー今なんと？

＊○＊○＊○＊○＊○＊○＊○

「ちょっと待て。なら、ラインは異世界から来たって事か？」

「ーーー俺も信じられないが」

おいおいおい。

冗談だろ…

異世界じゃなくて異次元だったら危うくお前ドラ○もんになるんだぞ！？俺はの○太か？！俺の将来の嫁さんがとんでもない奴だからお前来たの？！

「とととととと、とりあえずアレあの。じゃあお前ここを自分の世界だと思ってたんだよな？根拠は？魔力的なもんを感じたからじゃねーの？」

「根拠は、源馬だ。俺は今まで自室で寝ていた筈だが、強い衝撃に目が冷めて、起きたらあの場所だった。起きた場所も違えば本来土地に宿る精霊の力も感じないからおかしいとはおもったんだが、遠くからくる源馬を見てここはとりあえず俺の元いた世界だと確信した。」

「俺？なんで。」

「ーーーお前、目の色。黒髪で、碧眼じゃないか。それは俺の世界で、エルフがもつ特徴だったからな。俺は、源馬をエルフと勘違いしてたようだ。」

あーーー。なるほどね。
さて読者の皆。申し遅れた。
なんで俺は目の色が黒じゃないかっつーと、じいちゃんが外人だからです。目だけ受け継いじゃったみたいでね。アーユーオーケィ？
今はじいちゃんは亡き人だけど。

この目のせいで今まで散々なトラブルを被ってきたが、今回もこの目のせいだ。

ちくしょー。じいちゃん呪ってやる。

「ーーーそう、か。で、ライン。なら何でお前は異世界に来れたんだ。召喚されたわけでもないだろうに。」

当然の疑問だ。
水星から来たなんてもんじゃないんだ。そもそもどこかもわからない。
よっぽどの何かがない限り世界間をいったりきたりなんてできない話だろ？

「…こころあたりはある。が、それは魔術であってな。しかも古代に封印されている魔術だ。だからそう容易に扱えるものとは考えにくい…何故来たか、来れたかは正直分からない。」

おーけー。
つまりラインにもわからなきゃあ、当然俺もわかんないってわけね。

さて。

ーーーこれから、どうすっか。

幸か不幸か、明日からは長期休校、春休みってやつだ。

異世界人との同棲生活。
ーーーどーなっちまうんだよ。ほんと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8599z/

地球限定。

2011年12月28日03時50分発行